

東京蜘蛛談話会通信 No. 91 (1997年9月28日)

編集・鶴岡文雄 / 印刷・木紙 東京都豊島区 光プリンター

付録 池田博明

< 1997年秋 採集観察会 >

場 所：千葉県船橋市 「船橋県民の森」

日 程：第3回 10月19日（日） 雨天決行！！！
(第4回 1998年2月22日)

集 合：「船橋県民の森」（通称「県民の森」）入り口

時 間 11:00

世話人：貞元己良 0474-74-8889 工藤泰恵 0471-32-6853
長井芳夫 0474-72-9700 和仁道大 043-237-9303

行き方：

新京成電車
(松戸～京成津田沼)
の三咲駅下車、駅前
バス停から「県民の
森」行きで約10分

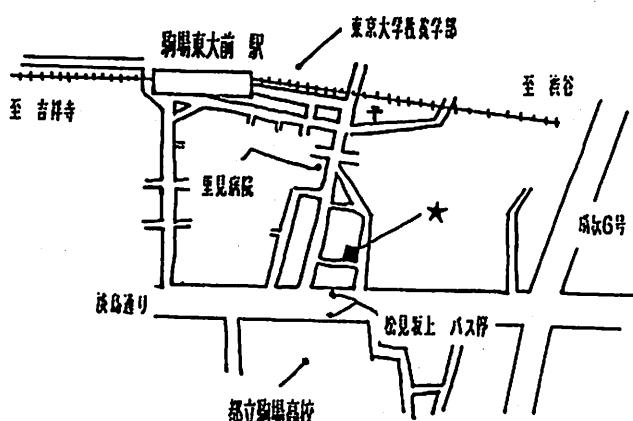
＊＊ 合同例会案内 ＊＊

日 時：12月7日（日） 10:00～

場 所：東京都目黒区立駒場住区センター (☎ 03-3496-2613)

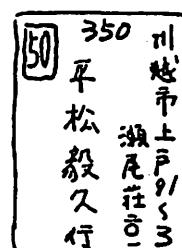
東京都目黒区駒場2-22-4 (京王井の頭線「駒場東大前」下車徒歩約8分)
多足類懇談会と合同による講演と懇親会
⇒ 世話人：平松毅久 (☎ 0492-33-8792)

|| 同封のハガキにて例会出欠の連絡と近況を世話人平松まで。
近況は通信誌上に掲載します。 ||



目黒区立駒場住区センター

ハガキの書き方



表

裏

- ・住所・氏名
- ・合同例会に
(出・欠)します。
- ・講演(有・無)
演題_____
- ・近況

談話会通信 No. 92 の原稿締切は12月末日です

採集観察会中間報告 (千葉県船橋市・県民の森) 第一回 1997年5月18日 晴

参加者(先着順、敬称略)： 貞元己良、長島充、和仁道大、鈴木成生、笠原喜久雄、今井正巳、工藤泰恵、笹岡文雄、伴満、池田博明、大久保光将、中野隆雄、加藤むつみ、安田明雄、新海明、千田高史、浅間茂、長井芳夫、泉宏子、平松毅久、以上20名

記 錄

1 ジグモ	2 6 ヘリジロサラグモ	5 1 アズマキシダグモ
2 カタハリウズグモ	2 7 センショウグモ	5 2 イズツグモ
3 マネキグモ	2 8 サガオニグモ	5 3 カバキコマチグモ
4 ユウレイグモ	2 9 サツマノミダマシ	5 4 マイコフクログモ
5 キヒメグモ	3 0 アオオニグモ	5 5 ネコグモ
6 バラギヒメグモ	3 1 ヤマシロオニグモ	5 6 ウラシマグモ
7 カグヤヒメグモ	3 2 ハツリグモ	5 7 イタチグモ
8 オオヒメグモ	3 3 コガネグモ	5 8 シボグモ
9 ツリガネヒメグモ	3 4 チュウガタコガネグモ	5 9 シャコグモ
10 ムナボシヒメグモ	3 5 ゴミグモ	6 0 キハダエビグモ
11 ヒメグモ	3 6 ヨツデゴミグモ	6 1 キハダカニグモ
12 オオツリガネヒメグモ	3 7 ギンメッキゴミグモ	6 2 ヤミイロカニグモ
13 コケヒメグモ	3 8 ヤマトカナエグモ	6 3 マツモトオチバカニグモ
14 オナガグモ	3 9 ヤマジグモ	6 4 ハナグモ
15 ヤリグモ	4 0 アシナガグモ	6 5 コハナグモ
16 スネグロオチバヒメグモ	4 1 コシロカネグモ	6 6 マミジロハエトリ
17 ムラクモヒシガタグモ	4 2 オオシロカネグモ	6 7 ヨダンハエトリ
18 ハラナガヒシガタグモ	4 3 キララシロカネグモ	6 8 デーニツツハエトリ
19 フタオイソウロウグモ	4 4 ササグモ	6 9 オオハエトリ
20 シロカネイソウロウグモ	4 5 ヒラタグモ	7 0 チヤイロアサヒハエトリ
21 ボカシミジングモ	4 6 クサグモ	7 1 コジャバラハエトリ
22 シモフリミジングモ	4 7 コクサグモ	7 2 カラスハエトリ
23 カニミジングモ	4 8 ヤマヤチグモ	7 3 不明 3種
24 キベリミジングモ	4 9 ハリゲコモリグモ	
25 ユノハマサラグモ	5 0 イオウイロハシリグモ	以上72種

採集観察会中間報告 (千葉県船橋市・県民の森) 第二回 1997年7月13日 雨

参加者(先着順、敬称略)： 貞元己良、長井芳夫、大久保光将、鈴木成生、工藤泰恵、古浜隆、池田博明、加藤晴弘、加藤ななえ、中野隆雄、加藤むつみ、以上11名

記録

1 ジグモ	27 オオトリノフンダマシ	53 キハダカニグモ
2 カタハリウズグモ	28 ヨツデゴミグモ	54 ヤミイロカニグモ
3 ユウレイグモ	29 ギンメッキゴミグモ	55 オオヤミイロカニグモ
4 マネキグモ	30 ヤマトカナエグモ	56 コハナグモ
5 オウギグモ	31 ヤマジグモ	57 ワカバグモ
6 ヒメグモ	32 アシナガグモ	58 マミジロハエトリ
7 オオヒメグモ	33 ジョロウグモ	59 アオオビハエトリ
8 カグヤヒメグモ	34 コシロカネグモ	60 ウデブトハエトリ
9 バラギヒメグモ	35 オオシロカネグモ	61 カラスハエトリ
10 ヤリグモ	36 キララシロカネグモ	62 ネコハエトリ
11 オナガグモ	37 ヒラタグモ	63 チャイロアサヒハエトリ
12 ヒシガタグモ	38 クサグモ	64 ヨダンハエトリ
13 ムラクモヒシガタグモ	39 コクサグモ	65 デニッツハエトリ
14 ムナボシヒメグモ	40 イオウイロハシリグモ	66 オオハエトリ
15 コンピラヒメグモ	41 ウズキコモリグモ	67 ヒメカラスハエトリ
16 フタオイソウロウグモ	42 ハリゲコモリグモ	68 不明 2種
17 キベリミジングモ	43 チビコモリグモ	
18 シモフリミジングモ	44 ヤマトフクログモ	以上 67種
19 カニミジングモ	45 ムナアカフクログモ	
20 センショウグモ	46 ヤサコマチグモ	
21 オニグモ	47 イタチグモ	
22 アオオニグモ	48 ヤバネウラシマグモ	
23 ワキグロサツマノミダマシ	49 シャコグモ	
24 ヤマシロオニグモ	50 アサヒエビグモ	
25 ハツリグモ	51 キハダエビグモ	
26 コガタコガネグモ	52 セマルトラフカニグモ	

新譜 紹介 ♪♪♪

CD「白い曼珠沙華 — 青山恵子が歌う中島はるの世界」

1. 白い曼珠沙華 2. 簿笛 3. 蜘蛛の子 火の絨 4. 火のぬすびと 5. 火の絨
6. 育宮 じやがたら文 7. 少女の日々 8. 追放 9. 結婚 10. 望郷 11. 手紙

全13曲収録

(有限会社ばるん舎発売 本体価格¥2,500)



♪→♪←♪ + ♪→♪←♪

これまでには無かった日本歌曲のCD。現代と伝統、西洋音楽と邦楽、これらを混ぜ合わせるのでなく、根の部分から一本の樹として葉を繋せてゆく、中島はる独特の世界今でありながら過去、遠い未来の記憶が存在するような、魂音楽である。

評 元全音楽譜出版社 山口清

《クモ関係の皆さまへ》

中島はる（晴子）

このCDの三曲目「蜘蛛の子」は、現代詩の大御所上野菊江氏（一時期佐藤幸子氏主催の“クモの会”に所属したこともある）の詩に作曲した15分程の歌曲です。

“クモは大きな耳をもっている”とか”母親グモの脚の先まで食べてしまうカバキコマチグモの子ども”など多少の誇張は大目に見て頂き、全体の流れから、大きな自然の懷に抱かれる生命存在の愛と哀しみのようなものを聴きとって頂ければ幸せに存じます。

♭—♪—♯ ♭—♪—♯ ♭—♪—♯ ♭—♪—♯ ♭—♪—♯

「白い曼珠沙華 — 青山恵子が歌う中島はるの世界」を購入ご希望の方は、作曲の中島はる（晴子）さん方へ電話またはFax(03-3712-5425)で注文しますと、定価¥2,500のところ¥2,300で入手できます。詳しいことも、直接中島さんへお問い合わせください。

（編）

沖縄合宿報告

「やちむん喫茶」へようこそ

新海 明

「合宿の夜は飲みすぎないように」と心に決めていたのだが、初日からもろくも崩れ去ってしまった。所詮、私の決心など「豆腐の堅さほどもないのだ」などと思いながら目覚めた。本土の脇腹に台風9号が直撃をくらわしているようだが、我々の合宿はちょうどうまく台風を擦り抜けるように始まった。名護の朝は青空と強い日差しに満ちていた。

合宿2日目。「おかめ」の洋ちゃんから「クモ軍団」と名付けられた一行は本部半島の中央にある今日の採集地、旭川に向かった。ここは嘉津宇岳の麓の原生林地帯で柑橘畑が点在するだけで、まず一般の観光客などは足を踏み入れない場所である。三育中学校手前の道路沿いにバスを止めて、採集観察会が始まった。ここでの太陽はまさに脳天へとその光を降り注いでいた。けれども、緑の陰へ入ると吹き抜ける風は涼しく、都会のコンクリートジャングルを縫って届く風とは比べようもない。道沿いの木々の間にはオオジョロウグモがそこかしこに大きな網を張っていた。藪を覗き込むとスズミグモのドーム網もある。これらの網の中にはミナミノアカイソウロウグモが多数侵入していた。チブサトゲグモやキヌアミグモもいた。どれもこれも沖縄ならではの光景だ。

樹元夫妻は円網種の糸のサンプル集めに精を出し、初芝夫妻は蝶を追いかけ、そして加村夫妻は道端に座り込んで一心に落葉を搔き分けていた。私は例によってクモを見たり、植物を見たり、観察する人を観察したりしながらふらふらと歩いていた。すると、道路を一台の車がやってきた。運転手は「おかめ」のご主人津田愛子さんだ。「おかめ」ではママと言わずにハハと呼んでいるので、津田さんというと何か実感が湧かない。ハハでいくことにしよう。実は今日訪れている旭川はハハの紹介で知った場所なのである。車を止めて出てきたハハが言うには近くに知り合いの喫茶店があるから皆をそこへ案内したいとのこと。行程表にはなかったが、予定外「こそ面白けれ」ば即座にOKした。

「やちむん喫茶」は旭川からバスで5分ほど走った所、嘉津宇岳の山ふところにあった。沖縄の古民家を改造したもので、庭には南国の花が咲き乱れていた。二階に上がると板敷きの吹き抜けとなっており、見下ろす屋根にいたたくさんのシーサーが印象的だった。透き通った夜空に浮かぶ月でも見ながら一杯やったら最高だろうなどと、白昼の夢をむさぼった。30余名が一挙に押し寄せたので「やちむん喫茶」は二階とも満杯となって、それこそ足の踏み場もないほどであった。ここで一同はシークヮーサージュースをご馳走になつたのだが、ここでのものは空港や土産物屋で売られているものとは全く違い、「これぞ本物！」の苦味のきいた忘れがたい味だった。本部の山間にはこのような喫茶店が点在することを私は最近になり知った。そのうちに喫茶店巡りでもしてみようと思う。

さて、「やちむん喫茶」をいざ出発という時になり、駐車場で人だかりができていた。

何だろうと分け入るとオオジョロウグモがなんとアズチグモ（たぶん、アマミアズチグモだろう）に網上で捕食されているではないか。まったく驚いてしまった。アズチグモといえば葉上でじっと獲物を待っている待ち伏せ型の捕食者とばかり思っていたので、私を含め…同感心のあまり…心に見入ったり、カメラのシャッターをしきりに切っていた。詳しい報告はそのうちにDRAGLINESにでも載ることであろう。

その後、渡久地にてから昼食の後に、海洋博公園に立ち寄り暑い日盛りの中をよく歩きました。

忙しく過ごしたその日の夕刻。涼風の抜ける乙羽岳の山頂から本部半島を見渡すと、その広さに改めて驚かされた。地図でみれば沖縄本島の北部にわずかに突き出た小さな半島なのだが、そこに残る自然の深さには何度も訪れても感動させられてしまう。きつめだった行程のせいか皆、山頂の心地よい風に身をまかせ、暮れ泥み始めた景色、飛びかう蝶などをみつめたままの人が多かった。小澤さんは古宇利島遠景をスケッチブックに収めていた。そして、私はそれぞれの楽しみに浸っているみんなの姿を心の画帳に描き留めることができた。

今年の合宿もまた多くの方々のお世話なくして実施できなかった。特に、懇親会場を提供して下さった「おかげ」の津田愛子さんと長嶺洋子さんには、沖縄の家庭料理の味を教えてもらっただけでなく、沖縄の心に触れさせてもらった。そのうえ、ここを訪れる地元のさまざまな方を紹介して引き合わせて下さった。この中に名護市役所の玉里吉健さんがあった。「玉さん」はあいにく病に倒れ合宿中にはお会いできなかつたが、「玉さん」の協力がなければこの合宿はできなかつた。市役所のバスの手配など全面的に応援していただいた。また、佐々木健志さんには琉大演習林の使用、海洋博見学の手配などさまざまな協力を本当に快く引き受けてもらった。その他、名護市役所の関係の方々にも多大なご援助をお願いした。ここに厚く御礼申し上げたい。

谷川明男さんは出発直前に御尊父が逝去されて急に参加できなくなってしまった。2年がかりで準備されていたので、さぞ心残りだったと思う。しかし、氏の入念な準備のお陰で「にわか添乗員」の任務を無事果たすことができた。帰京した羽田空港で谷川さんの姿を見付けたときは本当に嬉しかつた。

最後に、お忙しい中を参加していただいた下謝名松栄、千木良芳範さんに御礼申し上げるとともに、「2001年の蜘蛛学会大会」において沖縄で再会できることを期待して筆をおく事にする。

KISHIDAI A 担当は 木村知之 T215神奈川県川崎市麻生区東百合丘4-38-12
原稿送付は 池田博明へ T258神奈川県足柄上郡大井町金手1099

沖縄合宿の感想

安田明雄

談話会の合宿・観察採集会といえばどんな天候でもおこなうことが恒例だ。私が談話会に入り、はじめて参加した熊野での合宿は、台風の直撃にあったにもかかわらず、風雨が弱まった頃合いを見て観察に出かけた。一昨年の田無の観察採集会では雪の中おこなわれた（こちらは私は不参加だったが）。その後の談話会通信には、「もう降るものは鉄砲玉と槍しかない」という記事が載っていた。

そして今回の沖縄合宿。いよいよ在日米軍の鉄砲玉が降る番である。ヘルメットと防弾チョッキ持参で参加しなければならない、というわけではないが、必ず何か起こるので覚悟しなくてはならない（たとえばハブにかまれるとか）。

出発前、台風が近づいていたので、今回は最初から飛行機が欠航するのかと心配していたが、どういう訳か、いや幸運にも台風はそれで4日間晴天に恵まれた。

この合宿は名護市との共催ということなので、那覇空港で「歓迎 東京蜘蛛談話会」のような横断幕やミス名護からの花束贈呈を期待していたが、なかつた（当たり前か）。なんでも共催の件は、某人が沖縄にクモの調査をしに来た時によく行く飲み屋で、市職員と知り合ったことが始まりだという。まさに一期一会だ。それにしても市職員が飲みながらこんな重要なこと決めていいのだろうか？？？

初日の晩、名護城で観察・採集をおこなった時のことである。ここは市内でもハブが多いといわれる所である。崖地でオキナワキムラグモを探しているとき、光るものを見た！ハブの目か？（だいたいハブの目は光るのか）これはオキナワマドボタルという陸生ホタルの幼虫であった。かなりいるらしく、崖のあちらこちらで光っていた。また、この時期成虫になっているオキナワスジボタルも飛んでいた。見晴らし台では、オリイオオコウモリがみられた。

私は初めて沖縄に来たが、クモ以外にも沖縄ならではの生き物が見られ面白かった。といえば、街路樹も見たことがないような種類のものが多かった。

珍しい食べ物も多かった。沖縄料理で気に入ったものはゴーヤーだ。ゴーヤーはニガウリ（苦瓜）ともいわれ、名前のとおり苦いのだが、この苦さが病みつきになる。真夏の蒸し暑さに涼を呼ぶ？苦さである。蟹節とドレッシングでサラダにして食べたが、今度機会があれば肉や卵と炒めるゴーヤーチャンプルという料理も食べてみたい。

4日間とにかく暑かった。2日目の海洋博跡地の公園や3日目の琉球大学演習林は特に暑かった。クモについても、いろいろ思ったことがあったが、暑くてみんな忘れた。というわけでこれで終わり。

『沖縄』合宿紀行

(原文ママ)

▽泉 宏子（千葉市）

華麗な名護の花火や、おいしい「おかめ」の沖縄料理などすてきな思い出ができました。お世話してくださった皆様本当にありがとうございました。

クモの方では、チブサトゲグモと20年ぶりに再会でき感激しました。雌2頭を持ち帰って飼育していたのですが、結構鈍重なクモで、蚊や蛾など死骸でも口の所に持っていくと、もぐもぐという様子で食べてしまい、他のクモにない愛らしさを感じました。しかし、1頭は、黄緑色のペールをかけたような美しい卵のうを作るとまもなく死んでしまい、もう1頭も10日程で食欲を無くして死んでしまいました。思ったよりデリケートな蜘蛛だったようです。しかし、いつも飼育していたクモが死ぬたびに、自分と出会っていなかつたらこのクモはもっと長生きできただろうと思うと胸が痛みます。チブサトゲグモ達も、いろいろ教えてくれた事に感謝しながら標本にしました……。

▼工藤泰恵（柏市）

一日早く東京を発って、西表島へ行ってみました。谷川先生にいろいろ教えて頂いたお陰で旅は順調でしたが、島へ渡る船が台風の余波とかで、まるでジェットコースター。青い顔して楽しませて(?)頂きました。クモはあまり見ませんでしたが、唯一印象に残ったのが、チブサトゲグモの見事な迷網。幾何学的に美しく、立体的に整って、そこへまつ白い飾り帯。息をのんでみつめました。でも沖縄本島では私は全くこの迷網に出会いませんでした。何故でしょうか?

▽中島晴子（東京都目黒区）

念願の沖縄合宿は、感動の連続でした。初めに降り立った中城での、石垣を抜けた不思議な風。その夜出会えたオオコオモリと陸生ボタル。森にこだまするアカショウビンの声オオシマゼミの声。魅惑的な輝きのナナホシキンカメムシ、アカギキンカメムシ。おしゃれな蝶たちの乱舞。数えれば切れがありません。

そして至るところで見られたオオジョロウやチブサトゲを初めとする素晴らしいクモたちは、声を持たぬながら力強い自然の番人、あるいは魂のふるさとの墓守り、のようにも思えたのでした。

”沖縄合宿短報” 平松毅久（川越市）

世話人の谷川さんがご不幸により急きよ不参加で波乱の幕開けとなつたが、幸い台風は

入れ違いとなり無事沖縄に着いた。

沖縄のクモと言えばやはりオオジョロウグモだが、ジョロウのように迷網部がないこと、網によくクマゼミがかかっていることなどを知った。そのオオジョロウグモが小型個体ではあったが、アズチグモの一種に網の上で捕食されていたのは衝撃的で皆争ってカメラのシャッターを切っていた。与那の演習林ではオナガグモの卵のうに口をつけたケアシハエトリも観察された。結局ワクドツキジやツシマトリノフンのような超大物は採れなかつたが、地元の重鎮下謝名松栄先生は「そんな簡単に採られては我々の立つ瀬がない」という意味の事をおっしゃつた。まさにその通りでそんなに甘くはないだろう。ただわが精銳部隊の名誉の為に言わせてもらうと、既に夏枯れの時期に入っていたようだ。

クモ以外ではキノボリトカゲ、オリイオオコウモリ、イワカワシジミ、コノハチョウ等沖縄ならではの生物が見られたのは収穫であった。個人的には約10年前初めて聞いた壊れたポンプのような鳴き声の主がオオシマゼミとわかり胸のつかえが取れた気がした。

最後に素晴らしいネイチャー・ガイドとして大車輪の活躍だった佐々木健志さん、車の運転等で大変お世話になった名護市役所の職員の皆さん、ツアーコンダクターとして見事な手腕を発揮された新海明さんに厚く御礼申し上げます。有難うございました。

”沖縄だ！ 沖縄だ！ 沖縄だ！” 笹岡文雄（東京都豊島区）

東京生れの東京暮しを35年以上も続けて、すっかり東京の匂いが染みついてしまつた。人がいうほどここは、住みにくい土地とは感じない。そんなこんなで、自分はなかなかよその土地に憧れを抱くことなどなかつた。

ところが出発が近づくにつれ、頭の隅にわからないほど小さく隠れていたものがどんどん大きくなっていく。こういう時は実際その場所について見ると、現実との落差で落胆がそれ以上大きくなったりする。

でも沖縄は違つた。那覇の日差しは、掛け値なしの姿で自分を迎えてくれた。その土地にはその土地のリズムがある。自然や風土、人々の生活が相互に影響して、生み出される時間の流れのいうようなものだ。それがここでは故郷のあの東京よりも、自分に合つているような気がした。始めて訪れたの土地で当たり前のこと生活感がないはずなのに、この気持ちは合宿の4日間ついに消えることがなかつた。

また4日の間、行く先々で目に入る動植物は、見ると聞くでは大違ひだった。知識として脳裏にあるだけでは、大して役立たないことを改めて思い知らされた。知識と実際のものを必ず結んでおくことを、たくさんの沖縄産のクモの標本と共に持ち帰つた。

最後に今ごろこんな贅沢なことをいっていられるのも、お世話になった名護市の方々、そして自分のためにわざわざキムラグモを掘つていただいた、佐々木健志さんのおかげである。談話会の世話人各氏と共に厚く、お礼申し上げたい。

事務局は 平松毅久 〒350埼玉県川越市上戸91-3 瀬尾荘202

ショロウグモだより

野崎文江

今年、平成九年は夏至の前日までショロウグモの姿を見つけることができませんでした。三年前から午前五時半から六時半まで（定点観測）午後二時半から三時半までの気温を記録しています。今年は五月から朝の最低気温が低く、夏至の前日になってようやく台風の影響で二十度以上に上昇。日中の気温も十五度以下の日もあり冷夏？になるのではないかと思っていました。今年も野菜を売りに来る近くの農家から「今年の夏はどうか。稻の植え付け管理で気温が心配なので。」と予想を聞かれたので「ショロウグモの幼体が出現する様子から六月までは冷夏の予想。七月以後の気候次第で。」と話しました。冷夏とショロウグモの幼体の出現は関係ありそうです。今年も近くの雑木林、家々の庭、我が家の中庭の例年、巣をかける所を見て歩きました。六月に入っても一匹も見つかりません。オニグモ、コクサグモ、オナガグモはいるのにどうしたのかな？。四年前、我が家の中庭で寒さで動けなくなっていたメスを家の中に入れてやりますとフロ場の板かべに卵のうを作りました。翌年の五月に子グモがかえりました。体長は1.5ミリ納豆のように糸を出し一ヶ所にかたまっています。（数が多いので百まで数えましたが多いのでやめましたが）ビニールカップの中に入れました。最低気温が二十度、日中の気温が二十四度糸を出して飛んで行き、近くの木や家の軒下に巣を作りました。（体長三ミリ）このことから今年の六月は冷夏のため寒いので巣をかけられなかつたようです。六月二十一日早朝吹き荒れた南風に乗って飛んで来た幼体三匹を見つけました。体長三ミリ、巣をかけていました。今は、八月下旬です。四日間毎晩、雷雨です。時間雨量にして二十ミリを越していましたが寄らば大樹のかげ、十四（メス、オス）が元気に巣をはっていました。八月二十九日、メスは体長1.5センチ～1センチ、オスは5ミリ～6ミリ、人間の年令だと中学生～高校生位？お見合いしたのかと思ってみると、脱皮がら。三十日の早朝、体長1.5センチのメスの巣の中にオスが、お見合。夜がコオロギが鳴いてもう秋です。クモの恋の季節です。きっと元気なショロウグモの子が来年は出てくることを祈っています。

イソウロウ・コラム v.1

中国人が食べない四つ足は、イスとテーブルだけといいます。それほど中国人は何でも、食材にしてしまう民族だということでしょう。さて彼らはそれだけでなく何でも薬用にもしてしまうようです。クモも例外ではないようで、古くから薬物として用いられてきたといいます。多くが解毒の薬理を目的として、利用されたようです。ようすると不確かな言い方は、さすがに中国でも現在は漢方薬として使われることではなく、医事文書に記録があるだけだからです。どうもクモの生体を用いることが多かったため、段々利用されなくなったようです。

さて日本でもその中国の影響か、古い本草学の文書に薬用クモ類が登場します。たとえば、「土蜘蛛」「大蜘蛛」「蠅虎」「壁錢」などです。「土蜘蛛」はジクモ「大蜘蛛」はオニグモ「蠅虎」はハエトリグモ「壁錢」はヒラタグモのことです。

ハエトリは打撲に、ヒラタグモは鼻中のできものに薬効があるそうです。現在では試して見る人も、いないと思いますが。

日本蜘蛛学会第29回大会開かる！

8月23日（土）24日（日）の二日間、三重県四日市市の市立博物館を会場に、開催されました。北海道から沖縄、また大韓民国からも含め50名余のクモ形類の研究者、同好者が集まりました。

昨年の大会（東京・国分寺市）に引き続き都市部における開催でした。したがってこの大会も特にエクスカーション等は行なわれなかったものの、活発な討議がなされました。演題は一定の分野に偏ることもなく、20題（内、クモ19件・カニムシ1件）にも上りました。

また四日市市というと1995年、あのセアカゴケグモが見つかったところでもあります。それを反映してか今回は、3件のセアカゴケグモについての報告、研究の発表もなされました。

また会場の博物館では特別展示として、談話会会員でもある小澤實樹さんによる「クモと十二支のデザイン」展も、大会に先立つ14日より開催されました。これはクモと干支の動物十二種と、モチーフにデザインされた楽しいものです。

来年度第30回大会は、滋賀県草津市で開催される予定です。

（編）

「談話会通信」について

1. 会の催しの告知など、会員のみな様への連絡を主な目的としています。その他クモおよび蜘蛛形類全てに関する、「KISHIDAIA」誌ほど専門的でない文と新聞雑誌等の記事とを掲載します。
2. 郵便料金の関係で、本誌1号原則12円最大20円です。これに付録1～3枚ほどがつくことがあります。
3. 単年度最低3回の発行を基本としています。
①その年度の1号目は5月第3または第4日曜日、2号目は9月第3日曜日、3号目は2月第1日曜日が発行日になります。
②各号投稿締切は1号目が4月末日、2号目が8月末日、3号目が12月末日です。
③締切を過ぎた投稿は原則次号掲載となります。
④投稿文は内容によって、「KISHIDAIA」に転載をお願いする場合があります。
⑤投稿の原稿と新聞雑誌等の切抜記事は原則お返しありません。
⑥新聞雑誌等の切抜記事は、特別な場合を除いて「付録」の掲載になります。また「付録」は本誌とのバランスで、分量と締切によらず記事の掲載時期とが不定になります。

「談話会通信」の編集は笹岡文雄が行なっています。

投稿とご意見は下記の住所へお願いします。

〒170 東京都豊島区北大塚3-12-21

↔ 事務局だより ↔

*会員異動 (敬称略)

【退会】

小川新哉 (希望)、尾口治子・近藤昭夫 (逝去)

井伊信夫・井伊佑介・大久保襄・林秀幸・堀起雅弘・山田三重子 (規約)

尾口治子さんは6月、近藤昭夫さんは7月に亡くなられました。謹んでご冥福をお祈り致します。

(事務局)

【住所変更】

浪波徳義: 〒371 群馬県前橋市江田町245-1 アルペジオC102

野嶋宏一: 〒533 大阪府大阪市東淀川区上新庄3-1-2

コスモシティ森林公園2番館603号

増原啓一: 〒759-23 山口県美祢市於福町上4176

(増原啓一さんの住所変更のお知らせが大幅に遅れてしまい、大変ご迷惑をかけ致しました。お詫び申し上げます。)

∞ ∞

お詫びと訂正

談話会通信掲載の採集観察会中間報告（三浦市小網代の森）に、以下の通り間違いがありました。

No. 88、p. 3 第1回分 p. 4 第2回分, No. 89、p. 11 第3回分の参加者で笠原須磨生さんとあるのは全て、笠原喜久男さんの誤りでした。お二方には大変失礼かつご迷惑をかけ致しました。紙面を借りましてお詫び申し上げます。

(編集・笹岡)

郵便振込口座番号 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会
会費単年度 一般 ¥2,800 学生 ¥2,000

会計担当は 安田明雄 〒231神奈川県横浜市中区元町5-219

LAPITA

INTERVIEW

2

大人になり損ねた少年

撮成◎かくまつとむ
撮影◎柳沢牧嘉

育てた親方

「ホンチ捕縄」を

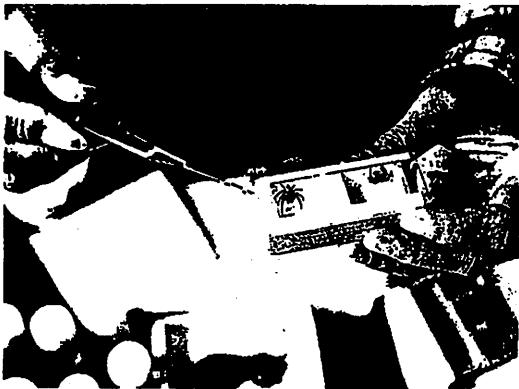
日本古来の遊びが、どんどん消えつつある。まるで、年を経るごとに少年の心が失われていくように。そんな時代の中で、子供のころ熱くなつた「ホンチ遊び」に、40年近くたつたいまも夢中になっている男がいる。普通なら、大人への通過儀礼に過ぎないはずの遊びの、どこか彼をここまで本気にさせるのだろうか。



前川 隆敏
まえかわ たかとし
(44歳)

前川隆敏さん提供 「ラピタ」'96.12月号

勝てば勝つほど自信がみなぎつて彼らの態度が大きくなるんです



「勝てば勝つほど自信がみなぎつて彼らの態度が大きくなるんです」と書かれた横断幕。背景には、競争する人々の足元が写っている。

「カッコいいでしょ。雄のホンチって、男者の舞い」のようにも見える。

バルサの上儀に這い上げられた2匹の蜘蛛は、お互いの姿を確認したとたん、それまで見ていた人間への警戒を忘れ、すべての注意力を眼鏡の相手に注ぎ始めた。

どちらからともなくじり寄るが、一定距離を保つてしばらく対峙。ナンと呼ばれる長い第一歩脚を、高々と左右にゆっくり振りかざして見つめ合つ。儀式なのか、充電なのかはわからない。その所作は大相撲の土俵入りのようにも、モンゴル相撲の「男者の舞い」のようにも見える。

「カッコいいでしょ。雄のホンチって、男者の舞い」のようにも見える。

大都市横浜。自然とは最も無縁であろうと思われるこのスマートな街に、民衆的にも大変貴重な野遊びが生き残っている。

ネコハエトリというハエトリグモの一種を幽わせるこのゲームを、ここでは「ポンチ遊び」と呼ぶ。前川さんは、この伝統遊びの継承組織「横浜ホンチ保存会」の会員であり、同会が毎年行なっている「ポンチ・トーナメント」には欠かせない有司だ。

敏捷な野生の蜘蛛を、2匹同時に、まるでリモコン・ロボットのように御す腕は神業。同時に前川さんは、自分自身、強いポンチを出場させ、獲物をもぎ取っていく名前である。過去12回のうち優勝7回。いわばホンチ界の「ひとり」平山部屋だ。

腹巻きにポンチ箱を入れてよく一緒に寝ました

勝負が始まった。大アゴの横にあるカギ型の触肢で激しい差し手争いが続く。その間、10秒もあれば、2匹とも倒れてしまう。

「こいつ、なんとなーく威張っている感じ。ホンチが面白いのは、勝てば勝つほど、自信がみなぎつて態度が大きくなる」と待つよろしく、その場で脚をそびやかしている(もつと見える)。

土俵の真ん中の「暗」は、もはや逃げた相手には見向きもせず、まるで勝ち名乗りをする(もつと見える)。

ターキーみたいに投げちゃう」ともある。ほらほら、腕をガリガリやるから小さいほうは、闘いにくくしやすまれやすいわけね。ときには引っかけたまま、ブレンバスで捕まることもある。

ほらほら、腕をガリガリやるから小さいほうは、戦がつてて。もうやりに入っちゃった。ああ、だめだ。逃げた。これで勝負あり。戦意を喪失して背中を見せたり、飛び降りちゃうと負けなんです」

ササボン、バラボン…
少年たちの中の英雄伝説

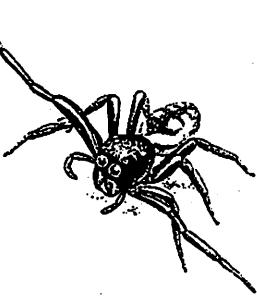
ホコハエトリは、4月から9月にかけて、ササ、マサキ、ソジン、ツベキ、アンサイ、ハイラなど、昆蟲幼虫は6~8回脱皮して而成るハエトリグモの蜘蛛。春から秋にかけては成虫、飛翔幼虫は6~8回脱皮して而成る。

体とおもむき、翌春に成体となる。寿命は一年。開拓や植樹などで一時消滅が、ホンチ遊びの奨励となり。

昔の子供たちの間には、ササやバラの盛みで捕るホンチは強いつう話がある。それがササボン、バラボンと呼んで別称される。また、腹部の黒斑や色合いで、アシロッケン、キンケン、アカツキント等があり、独自の分類方法を持っていた。

大きめ強めのホンチのいるところをさがすからね。ケツをグイッと引っかけられたらぼうは、闘いにくくしやすまれやすいわけね。ときには引っかけたまま、ブレンバスで捕まることもある。

びをもぐるふるひだりたつて。'89年、市境に跨った。これが住む人たちが89年に結成したのが横浜ホンチ保存会。毎年春の大會には、この蜘蛛に魅せられた大人の少年が多數集まる。金の盾で、わせは手話で前川さんをや。↑28 横浜市西区中央2-51-12



ホコハエトリ、ササボン、バラボン…
少年たちの中の英雄伝説



↑「外の土俵で闘わせて、逃げたほうが負けというルールは、たぶん僕らから。それまでは箱に閉じこめるデスマッチでした。扱い方さえおぼなから出したほうが積極的に闘うことがわかった。僕らの世代の発見ですね」

ですから、弱いホンチと強いホンチは、最初に見ただけでわかりますね。人間の男社会にも共通点はあります。人はケンカが弱くても、ほかの才能で勝ち上がることができる。けど、ホンチの場合、収穫生活で、じつチャンスはまずない。僕はとりあえず、人間に生まれてよかったな(笑)」

前川さんは、昭和27年、横浜市西区の現住所で生まれた。彼が子供のころの横浜は、豊かというほどの自然はもうなかつたものの、ちょっと自転車を走らせば、カブトムシの捕れるクヌギ林くらいはあった。

近所の埠頭もコンクリートは少なく、眼が合えば擦擦や立ち話ができる、背の低いサキの生け垣がどこまでも続いていた。

そんな生け垣を住みかとし、ハエなどの小型昆虫を、猫が鼠を捕るように狩る徘徊性の蜘蛛がホンチである。

蜘蛛にケンカをさせ、その勝敗を楽しむ伝統は、東南アジアに広くある。日本でも蜘蛛の種類こそ地域によって違うものの、かつては各地に存在し、それも黒潮の流れに沿って帶状に分布していた。

八重山、沖縄、奄美。九州で北回りの対馬暖流に乗ったこの遊びは、鹿児島、能登、佐渡、さらに函館まで運ばれた。

一方、分岐点の九州で列島の南端に同じ伊勢志摩、伊豆へと伝え、黒潮が離岸し始める房総半島を北の終着駅とした。横浜の伊勢志摩は、「クモの合戦」(川名興・資藤慎一郎著、未来社刊)という本に詳しい。

ら西洋を主導してきた近代日本の前線基地ヨコハマ。ホンチ遊びは、その横浜の生き化石であるとともに、日本全盛としても絶滅の危機に瀕する海流文化なのである。「彼らのおじいさんは富山生まれだから、ホンチのことを知りません。けど、大正14年生まれの親父は、よく遊んだそうです。僕の子供のころは、着物になると駄菓子屋にホンチ箱は昆虫採集セットと同じく切れると文房具屋に走るわけです。横浜じゃ、ホンチ箱は昆虫採集セットと同じく古い普通の学童用箱だったのですよ。仕切りが6つある紙の小箱で、2個が3個買つんです。ひとつじゅう匹しか入らないからもの足りない。やっぱり、いっぱいホンチを持つていいと満足できないから。売っているのは、全部紙だから中が見えないのに。それじゃ面白くないっていうんで、ガラスの破片を拾つて、ガラス屋のおじさんに箱に合わせて切つてもらひます。それを蓋にして、とまときボケットから出していく。二段マリ詠める(笑)。シーズン前に新しい箱を買ひにいく、あのウキウキした感じがたまらなく好きでした」

「百士三平・フィールド・ノート」(百士三平著・小社刊)によれば、屏風の油腳は、マッチの空き箱にのの蜘蛛を銅で、油に出られない日持ち寄りで留め、金を賭けたところが、40年ほど前の横浜には、こうした子供用のホンチ専用箱があり、それを作つて生計を立てる職人もいたのである。

「僕がホンチを見たのは小学校2年のころでした。年上のガキ大将が夢中になつて、それを小さい子が見て自然に見える。あのいるはどの遊びもみんなぞうでしたね」

サラブレッドみたいに勝つために生まれてくるホンチを作りたい

春のお祭りのところから、パパといって、重成体が出てきます。もっとも、これは果を見つければ簡単に知れるので、早い子は各のうちから持っていました。このパパをどれだけ早く脱皮させて、成体のホンチにかかるかが最初の勝負。人より早くホンチを

春のお祭りのところから、パパといって、重成体が出てきます。もっとも、これは果を見つければ簡単に知れるので、早い子は各のうちから持っていました。このパパを

持つことがステータスなんです。

だから、腹巻きにホンチ箱を入れて、よく一緒に寝ました。温めると脱皮が促されますが、箱が滑れやしないかと心がけますからね。箱が滑れやしないかと心がけなくて、熟睡できなかつたもんですよ。

これはホンチ遊びの序盤戦というべきも

走り回って闘わせるの夢中で。だから、学期はいつも、女の子とかガリ勉タイプの男の子には大きく後れをとっていますよ。男の子には大きめの箱を入れて、よ

く一緒に寝ました。温めると脱皮が促されますが、それはしなかつたです。ベーゴマなどかメンコだと、收つたり收られたりの遊びですが、ホンチは勝ち負けだけ。もっとも、学校では、女の先生のクラスなんかは禁止されましたね。ランデセルに入れて持つてゐる奴がいたから(笑)。

そのころ、僕が上級生につけられていたあだ名は、「くもいち」でした。第一人者だつていう自信をアピールしなくて、みんなの前でホンチのウンチをなめてみせたりしたことがあつたんだよ。

ホンチへの興味を深めるきっかけが、小学校3年生の春だった。前川少年は、近所の駄菓子屋の前の植え込みで、1匹のとび抜けて大きなホンチを捕まえた。

彼がその巨大ホンチの人つた箱を惚れられと眺めていると、やはりホンチ箱を持つた見知らぬ上級生が通りかかった。

「お前もホンチやるの?」じゃあ、やらぞうよ」と掛けできんだよ。いいよって、こっちのホンチ見せたら、向こうは、もうびっくりして逃げていっちゃった(笑)。

ホンチの時期は、学年が何年だろ? が、ケンカが喧嘩うが強かるうが、勢強がどうだろ? が問題なかつたですね。その時期だけは強いホンチを持っている奴が一番尊

ので、すつかり巣になつてあちこちでホンチが捕れるようになると、関心は誰のホンチが一番強いか、ということになつていく。

「盛盛期はちょうど一学期の最初。でも勉強しないんじゃない。強いホンチを探して

と思います。僕は3月30日の早生まれで、同学生でも年下側を感じたから」

しかし、こういった遊びが過渡化。テ

イン・エイジヤーになると、子供は素朴な遊びほど興味を持たなくなる。

小学校の卒業は、町内会のガキ大将組織からの卒業も意味し、中学に入ればクラブ活動や受験競争という新しいコミュニティに至らぬなしに組み込まれる。大人としての自觉心が芽生え、住む世界も絶対にくく、刺激が多くなる。無理もないことだろ?

「まあ、中学に行つてまでホンチやつてるのは僕ぐらいだったですよ。僕が中学に上がったのがちょうど東京オリンピックの年で、横浜も開発が急ピッチになつました。ホンチがいるような場所自体、急速になくなつちゃいましたしね。

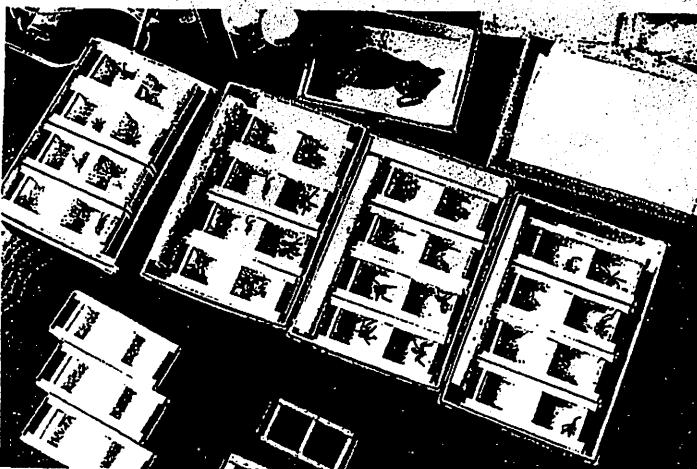
それと、テレビの影響も大きい。どの家にも黑白テレビが入り出して、みんな外で遊ばなくなつたから。ですから僕らよ

り下の世代はあんまりホンチ遊びの経験がないんですよ。箱もいつの間にか消えた。

みんながホンチのような遊びからどんどん菜して、大人になつていく中で、僕だけひとり、卒業できませんでした。

高校時代は、どうせ人に話しても理解してもらえないと思ったから、ホンチやつてなんて誰にもいわなかつた。帰りはホンチのいそゞ道をひとりで帰つて、強そうなのを見つけると、通学カバンにそつと忍ばせていたホンチ箱を取り出します。

クラブに入ると、ホンチができるなくなるから、中学でも高校でも一切入りませんでした。高校には生物部もあったけど、どう



→1952(昭和27)年、横浜市西区生まれ、懐かしい横浜の自然風景を知る最後の世代、前川さんの所属する横浜ホンチ保存会では毎年GWに、懐古会(田舎を楽しむ会)とトーナメント戦を開催してきました。

全手廻のホンチ箱で、一棟のホンチのワールドマーチャンツ。毎年、新しい野家の血を入れながら、多くのホンチを駆除する。脱皮や成長などの結果に記録。その結果、競技結果は、日本由来学会にも展示発表する。

敬される。そういう風潮に惹かれたんだ

も後の生物観とは思つべですかね。頬張就

親しい、一生懸命頑張なんかして。僕の考
える生物学は遊びに迷着してるんだけど、
学校の生物学は勉強に迷着してる。

だから生物の迷着もつとも面白いと思
わなかつた。生き物は好きだし、ことに山
のいとなの先生より詳しいという自負もあ
つたけど、科目としての生物の成績は、ち
いともよくなかつたのです」

高校卒業後は、進学する意願をせず、3年
間遊んでいたといふ。当時の心境を僕なり
に回ってみたのだが、あまり明快な回答を
得られなかつた。よく覚えていないのかも
しれないし、生物クラブに興味もつたまう
な違和感を、社会全体の空気の中に感じた
のかかもしれない。まあ、人の背脊は便所の
扉と同じで、外からやたらと引っ張るもの
ではない。説教はやめておこう。

世間的には無差別食の時期を、彼は蜘蛛
の研究と、絵やクラシックギターに没頭し
て迎む。しかし、いつまでもラブララし
ているわけにもいかない。そこで横浜市職
園芸、それに蜘蛛類全般の調査研究に余念
がない。最近話題の泥蜘蛛、セアカゴケグ
モもそのテーマのひとつだ。自宅2階の彼

一人つてみて初めてわかつたんですけど、
役所つて春が忙しいんですね。ホンチは出
すのと、強いホンチ探す時間が(笑)。やつ
ぱり失敗したあと思いました。

10年から絶えゼンタに裏面になり
ました。ここなら少しは近い職場だろ
うとも思つたんですが、当時の絶えの仕事
は僕の考る緑とは違つんですね。ホンチ
のいる、本米的な優がな綠いや、芝生
や公園の緑色を管理するのが仕事。結局
2年で辞め、それからはホンチの盒面にや
つていた紙で食つていくことにしました

蓋を開け放してやると、ウンチを
ボトツとやる。かわいい奴らです
エになる。釣り人は蟻や昆虫にならないよ
うに冷蔵庫に入れますが、僕はまったく逆
の使い方をしているわけです。

子供のころは唾や水も飲ませましたが、
今は砂糖水やボカリスエットです。こうす
ると長生きすることがわかつた。エサや水
をやつたら敗歩。ホンチは大く同じで、自

分の糞ではウンチをしたがらない。蓋を開
けて放してやると、すつきりしたという感
じでボトツとやる。かわいい奴らです(笑)。
け残し、あとは自然熟成ができるうな場所
を探索して放す。おそらく砂利地などはわか
っていても、いつか横浜で、昔のようにホン
チ遊びが隆盛になることを念じつ……。

一要するに、一日置かれる快感をずっと味
わいたいんですよ。ですから僕はそのうち
作りますよ。サラブレッド並みに、勝つた
ために生まれてきたうなホンチを

↑目を瞑すと素早く跳ねて逃げてしまう2匹
のホンチを、器用に土俵上に誘導。奸詐負は、
行司のこの最初の技術にかかっている。

↑敗の存在を確認すると、お互い大きくケン
を振りかざし睨み合う。昔、武道一直線で桜
木望が見せた対戦ポーズにも似ている。

↑サン(劣弱)を絡ませての力比べ。ホンチに
よってはすぐに組まず、低い姿勢で体を小刻
みに揺すって睨み合う(地取りと呼ぶ)。

↑長いケンで相手の顔を搔いたり、脚を取り、
スキがあれば噛みつく。豪快な投げ技が出る
こともある。

↑勝負あり。相手に背を向けたり土俵から落
ちたほうが負け。左は勝ち跨るホンチ。勝つ
たホンチは、ますます闘争的になる。

の部屋には、ホンチ箱や脱皮標本、それに
孵化容器の類が所狭しと並んでる。

「エサの蜘蛛も、最初のころは三週半もあ
りまで捕りに行つたんですよ。200

匹捕つても、ホンチを50匹も捕つてい
ればすぐなくなつちゃう。そのうち、一方

法を思いつきまして。釣り具の上位罠で、
釣りエサのサシを賣つて来るんです。あれ

だとめちゃくちやん安いし楽なんです。

温かいところに置いておくとすぐキンバ

エになる。釣り人は蟻や昆虫にならないよ

うに冷蔵庫に入れますが、僕はまったく逆

の使い方をしているわけです。

子供のころは唾や水も飲ませましたが、

今は砂糖水やボカリスエットです。こうす

ると長生きすることがわかつた。エサや水

をやつたら敗歩。ホンチは大く同じで、自

然の役割。さらには人と自然の関係を多く
の人に理解してもらつねばと思つてゐる。

「うちの会の中にも、ホンチは好きだけど
ほかの蜘蛛には関心がないといつもいる。
し、ホンチ遊びに興味があると話してくれる
学者も、一通りのことがわかるともう水な
くなつちゃう。まして一般の人(ホンチの)
立場や魅力を伝えるのは難しい。そのため、
より多くの人がこの遊びを体験でき
るように教を揃えておきたいし、僕にどう

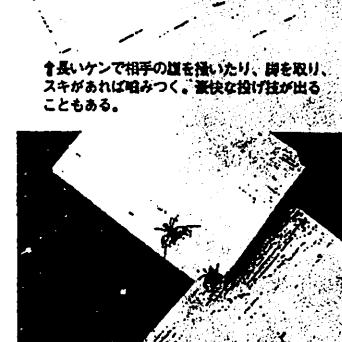
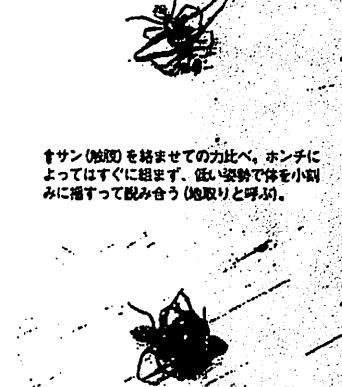
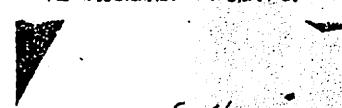
でも、ブリーディングは彼らの生態や行動
を改良するためのいい研究なんです」

務めの終わつたホンチは、「品の種類だ
け残し、あとは自然熟成ができるうな場所

を探して放す。おそらく砂利地などはわか
っていました、いつか横浜で、昔のようにホン

チ遊びが隆盛になることを念じつ……。

横浜の快人蜘蛛男は、少年の日に相手え
たあの巨大な大横幅を今も思いかけている。



↑勝負あり。相手に背を向けたり土俵から落
ちたほうが負け。左は勝ち跨るホンチ。勝つ
たホンチは、ますます闘争的になる。

1997年(平成9年)4月6日 日曜日

宮崎県立農業科学館

いとしの毒グモ

巨大なクモをいとしうるクモの展覧会に出すた
に眺めていたのは、二ヵ月、特別にサンフランシス
コから輸入した十一匹の生
ジーランドにあるオークラ
ンド戦争記念博物館の動物
飼育担当者、ブライアン・ロートンさん。メスのこの
クモは、七月初めから開か
れるクモの展覧会に出すた
るが、特にサンフランシス
コから輸入した十一匹の生
きた毒グモ、タランチュラ
もロートンさん、貴重な農
示品とは言え、こんなに顔
を近づけて捕らないのでし
ょうか?

海外
トピック

(ロイター=共同)



↑
石野田辰夫さん提供

鳥を襲う蜘蛛

石野田辰夫さん提供

小松 孝寛・鈴木 相司・安本 潤一

1996年11月2日、沖縄県与那国島に行った。この年はクロテンシロチョウがかなり発生しており、桃原では成虫のほかギョボクには卵も産み付けられていた。その後、貴馬に行くと、圃場の入り口にハイビスカスが咲いており、ツマベニチョウが吸蜜に来ていた。圃場の中にもハイビスカスが咲いているので、もう少し奥に行こうと三人で歩いていくと、鈴木さんが大きな蜘蛛の巣に小鳥が掛かっているのを見つける(写真1)。

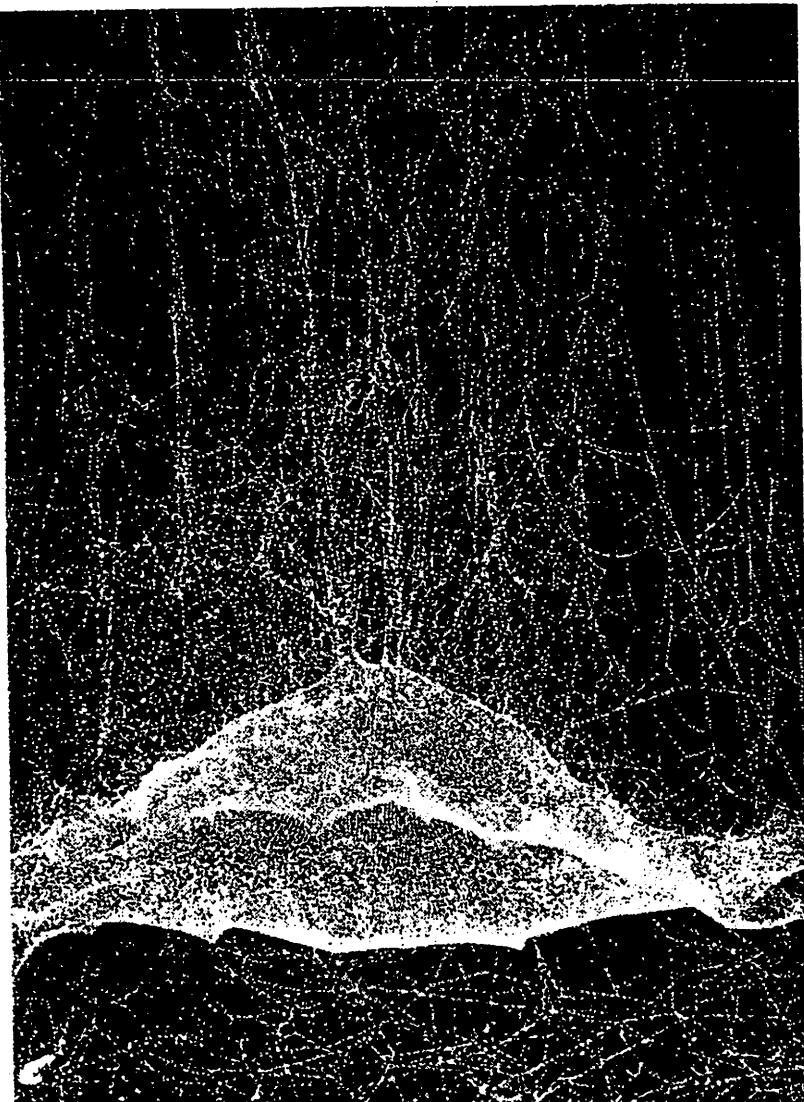
蜘蛛の巣は直径2mにもなろうかという大きな物である。この時点では小鳥はもう死んでいるようで動かなかつた。鳥の力でも脱出できない程強い蜘蛛の巣もあるもんだと感心したが、まさかその時点では蜘蛛が小鳥を糞にするとは考えなかつた。数時間後、同じ場所に来て確かめてみると、蜘蛛は小鳥を糞

優秀賞

「クモの巣」 竹尾 康男 (宮崎市)

梅林 力さん
提供

No. 91
付録4



朝日新聞
'97.6.12

でがんじがひめにしてその上に乗り、体液を吸っていた(写真2)。びっくりするとともに生在競争の厳しさを改めて思い知らされた気がした。蜘蛛と小鳥の種類が知りたかったので、帰ってから石野田辰夫さんと中島義人さんに写真を見てもらったところ、蜘蛛はオオジョロウグモ (*Nephila maculata*) で、小鳥はメジロであることが分かった。石野田さんの話によるとオオジョロウグモは日本最大の蜘蛛で奄美以南に生息し、その果には小鳥もたまに掛かることがあるとのことであった。蜘蛛と小鳥を同定して下さった石野田さんと中島さんに感謝いたします。

<観察データ>

場所：沖縄県八重山郡与那国町（与那国島）貢馬の林縁

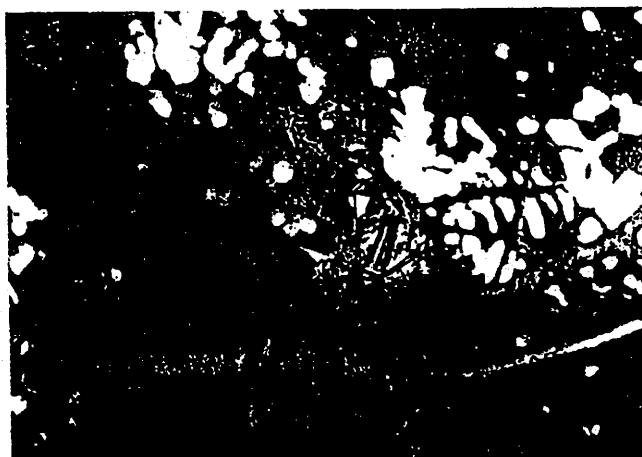
日時：1996年11月2日9時（1回目）、13時（2回目）

天気：曇り

写真1



写真2



(編)注
コピーのコピー為
写真不鮮明
ご容赦下さい

(こまつ たかひろ：宮崎市本郷北方2479-23)

東京蜘蛛談話会有志

日本蜘蛛学会に入会しませんか

日本蜘蛛学会という組織があります。世界の蜘蛛関係の学会の中で最も古く、1936年に創立された由緒ある学会（創立時の名称は東亜蜘蛛学会）です。

会員数は外国会員も含めて約300余名です。

自然保护や保全、生物多様性に対する関心が高まっている昨今、日本蜘蛛学会および各地の蜘蛛同好会の重要性は以前にも増して大きなものがあります。しかし、他の動植物関係の学会同様、日本蜘蛛学会もこのところ、会員数の停滞もしくは減少傾向が見られます。会員数が300名を切ると学術団体としての資格に問題が生じるため、日本蜘蛛学会では危機感を持ち、この傾向に歯止めをかけようと、今秋から普及紙『遊糸』の発行などを計画しています。しかし、最も効果的な対策は新入会員の増加です。そこで私たち東京蜘蛛談話会有志は談話会会員に学会への入会を呼びかけることとしました。

この機会にまだ日本蜘蛛学会に入会されていない方へ入会を御薦め致します。日本蜘蛛学会の会員には会誌 *ACTA ARACHNOLOGICA* が年2回、普及紙『遊糸』が年2回郵送されるほか、学会の運営に関する意見の発表、蜘蛛学会大会での発表や発言が保証されます。また蜘蛛学に関して有形無形の便宜を受けることができます。

日本蜘蛛学会への入会資格は特にありません。蜘蛛に関心のある方ならば誰でも入会することができます。現在は研究者、アマチュアの別を問わず、高校生を始めとし老若男女を問わず会員になっています。決して堅苦しい専門家集団ではありません。年会費は7000円（大学院生を含む学生5000円）です。

ぜひ日本の蜘蛛学を支援していただきたいと思います。

日本蜘蛛学会に入会される方は下記の事務局へお申込み下さい。

(以上文責・池田博明)

〒525-77 滋賀県草津市野路東1-1-1 立命館大学 理工学部

生物地球科学研究所 吉田真方 日本蜘蛛学会 事務局

電話 0775-61-2660 FAX 0775-61-2661